
『夏休みの計画』～目指せ、熱湯甲子園！～

AQ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『夏休みの計画』〈目指せ、熱湯甲子園！〉

【Nコード】

N1059I

【作者名】

AQ

【あらすじ】

夏休み直前、学園のアイドルに告白した野球少年。しかし彼女は『特殊な性癖』の持ち主だった！ タッチ好きに贈るアホラブコメ。（電撃ししお題『夏休みの計画』用作品。軽くてポップな正統派学園ラブコメです。『タッチ』へのオマージュが盛り込まれています）

この学校には天使がいる。

陶器のような肌、柔らかな栗色の髪、つぶらな瞳、バラ色の頬、果実のように赤い唇。

天使の名は雷音真亜子。どんな男にも墮ちない高嶺の花。

夏休み前日、俺は勝負を挑んだ。

旧校舎一階、来賓室前。

無料の給茶器が置かれているため、寒い日は生徒達が群がるが、この時期は閑散としている。

涼を求めて廊下の窓を開ける俺の耳に、微かな足音が届いた。振り向くと、肩までの髪をふわりと弾ませながら一人の少女が駆けてくる。

「野球部の、南達也君だよな？」

心臓バクバクで待ち構える俺のシャツは、すでに汗だくだ。一方彼女は汗一つかいていない。胸元のリボンが涼しげに揺れている。

彼女は軽く会釈すると、天使のような眩しい笑顔を浮かべた。

「手紙ありがと」

「いや、らいおんセンパイこそ、どーもです！」

直立不動でガチガチな俺に彼女は苦笑し……フツと俯いた。

「……もう全部バレてるのね？ 私のこと」

少し色素の薄い瞳に、長い睫が影を落とす。憂いを帯びた彼女の横顔に俺は見とれた。その肌の白さといったら、どんな酵素パワーで漂白したのかと思うほどだ。

これだけ可愛い彼女がフリーなのは、ある性癖のせい。

彼女を得るためには『あの部分』が強い男でなければならぬの

だ。

「今から、あなたを試していい……?」

ゴクリと生唾を飲み込み、頷く俺。

彼女は細い指をゆっくりと伸ばし……。

『ポチリ』

『じよろじよろじよろ……』

溜まりゆくホット緑茶。見つめる彼女の瞳はキラキラ輝いている。彼女は、いわゆる『熱湯フェチ』だ。

告白を断るときは必ず「私、猫舌の人ってダメなの」と言う。猫舌じゃないと主張する男は、全員ここへ呼び出して「このお茶一気飲みできる?」と問う。来賓室前のカーペットには、あえなく凡退した彼らの汗と涙と吹いたお茶が染み付いている。

そして今、俺の打席がやってきた。

バットのグリップを握るがごとく、湯気の立つ紙コップを掴む。薄い紙越しに触れる指が、火傷サイレンを鳴らす。

俺は負けない。君のことが、本当に好きだから。

入学式で見かけた時は、単に綺麗な人だなと思った。彼女が生徒会長として熱弁を振るう姿に、少し心が動いた。部活がらみで生徒会室に行った時、初めて会話して……恋に落ちた。「甲子園に行きたい」と呟いた彼女のために死ぬほど特訓し、レギュラーの座を勝ち取った。

彼女が傍で応援してくれるなら、俺はやる。来年の夏は、必ず甲子園に連れて行ってみせる! そして今年の夏は、海に連れて行ってみせる! 祭りにも! 花火にも!

膨らみかけた煩惱デリート、心頭滅却した俺は、その液体を一気に口の中へ！

『ゴックゴックゴック……』

手首のスナップ、首の角度、脇の開き……全て特訓どおり！

ノルマは毎日湯のみ百本ノック。温度は若干手心を加えた八十度。実戦では九十八度といったところか。なあに、前評判より速い球を投げるピッチャーなどザラだぜ！ 少しスイングを速めれば……！

「ぐはあっ！」

俺は、熱湯という好敵手に打ち勝った。

「キミって変な人ねえ」

呆れたような声色に、俺は涙を堪えて頷いた。

タラコ唇を半開きにし、でろりと舌を出してハアハア言う俺は、変な人を通り越して立派な変態だ。

彼女はクスツと笑うと「南君だけに、私の秘密教えてあげる」と囁いた。

「実は私……宇宙人なの」

呼吸を止めて一秒……どこるか永遠に息が止まりかける俺。

彼女の父親は、太陽系外のマアライオン星からやってきたそうだ。ところが地球の女性を好きになり、あっさり故郷を捨てた。今は親子三人地球人として平和に暮らしている……。

淡々と語るその声は心地よく、俺はいつしか真剣に耳を傾けてい

た。

「聞いてくれてありがとう」

彼女は照れたように眩くと、不意に俺の右手を握ってきた。

正確に言えば、俺が握ったままの紙コップを。

「マアライオン人の女には、一つ武器があるの」

俺のゴツイ手がひんやり冷たい小さな手で包まれ、口元へ引き寄せられる。赤い唇が開かれ、紙コップへ伸ばされるピンクの舌。

天使のように可憐な宇宙人が、ほうっと甘い吐息をついたその時。

『じよぱあつ！』

飛び出したのは紛れも無い 熱湯。

俺の脳みそも、一気に沸騰した。

手から滑り落ち、靴先で弾む紙コップ。熱湯が足を濡らしたが、俺は一步も動けなかった。

彼女の潤んだ瞳に囚われていたから……。

「この“熱い吐息”で、求愛してくれる男を試すの。もし耐えられるなら」

夕暮れの涼しい風が頬を撫でる。

俺の肩に手を添え、少し背伸びした彼女は、黙って……キスをした。

天使のキスは、魔法のキス。タラコ唇も、ヒリつく舌も、ただれた喉も……彼女の舌に触れられ、その唾液を飲み込むと、全て元に戻っていた。

そつと踵を降ろした彼女は、唇を俺のシャツに押し当てて、再び甘い吐息を漏らす。

「南君……私を甲子園に連れてって？」

胸に熱いモノを感じながら、俺は思った。

デートの前に、熱湯風呂で特訓だな……と。

(後書き)

電撃リトルリーグへの初挑戦作品です。見事落選しましたが、個人的には気に入っております。内容的には、初めて『ライトノベル』を意識して書いてみました。なので、こんなキャラです。(余裕ができれば、ライオンさんの両親編も書いてみたいところです)

ちなみに、主人公の南君は『チビ犬とムツゴロウの恋愛事件簿』に出てくるサヤマ君の親友……というポジションです。『チビ犬探偵』の回で、サヤマ君に「頑張れよ」と囁かれた後、この告白へ挑戦したというリンクの仕方でした。このバカップルは、今後チビ犬の方のわき役としてちょこちょこ出てくると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1059i/>

『夏休みの計画』～目指せ、熱湯甲子園！～

2010年10月9日03時50分発行